

言語障害児教育に関する若干の考察

進 藤 俊 一

The several considerations of corrective education
for children with language disabilities

Shunichi Shindo

(昭和47年11月10日受理)

はじめに

最近, Chomsky, N は, その多くの論文⁽¹⁾において, 言語学, 哲学, 心理学の関連領域から言語に関する高度な技術的研究が, 人間の精神作用の解明に, どのように貢献できるかを論じている。即ち, われわれ人間の行動を, 学習行動, 習得行動に限定して考察した場合, これは確かに精神作用によるものであることは明白であり, その機制についての解明は, 学習, 習得行動の結果が明確な規定に適合し得てはじめてなし得るものと考え, 言語は, 人間が学習し, 習得し得たもののうち, 最も定式化の可能なものであろうという主旨のことを述べている。彼は, この人間の精神作用の機制を解明するにあたって, 経験的な事実を基礎としつつ作業仮説を立て, 種々の検証を行なっているが, この機制の解明によって, そこに, あらゆる言語に共通した普遍的性質の存在を確認できれば, 人間の精神作用に固有の特性を見出し得るとし, 言語のもつ意義の重要性を強調している。

この Chomsky, N の言を俟つまでもなく, 人間生活における相互のコミュニケーションの主要な方式としての言語のもつ重要性については, いまさら多言を要しないところである。個人のもつ言語能力は, 社会的, 経済的に到達し得る個人の一つのレベルを決定する一要素であり, また, 人間の情緒的成熟において主な役割を演じ, さらに, 社会行動においても, 欠くことのできない重要な因子であることは云うまでもない。

言語行動は, 四つの行動, 即ち, 「聞く」, 「話す」, 「読む」, 「書く」に区分されるが, そのうちの「聞き」, 「話す」行動は, コミュニケーションにおいて主要な位置を占めることから, 言語は, ロー耳信号系として考察することができる⁽²⁾。

口頭による表現, 耳による受容というロー耳信号系としての言語行動が, その機能を十分果し得ない状況にあるとき, 個人は, 心身に, 非常に不利な条件を負わねば

ならないことは云うまでもない。所謂, 言語障害は, 成人は云うに及ばず, 殊に子供においては, 将来の「読み」, 「書き」行動の発達に重大な影響を与える。子供の言語障害は, 先ず, 全般的な知的発達, 認容の発達の遅滞として現われ, 概念形成, 思考, 学習の面で著しい影響があることが指摘されている⁽³⁾。

さらに, 子供の能力発達について, 集団生活, 特に学校における言語使用のもつ意義は極めて大きい, 言語障害は, 学級での子供の遅滞を助長し, 子供と教師, 子供相互間のフォーマル, インフォーマルなコミュニケーションに多大の支障を来す結果, 子供は甚々深刻な経験を味わうことになる。また, コミュニケーションにおける子供なりの種々の試みも, 結局は失敗することが多く, 日常生活において, そのような事態から生ずるフラストレーションに, 毎日直面せざるを得ない言語障害児の情緒的, 社会的適応の問題は, 言語障害児教育上軽視できない重要な問題である。

子供が言語に障害をもつという事実は, その両親, 家族にとって深刻な問題であり, 従って, 保護者は, 適切な専門的治療機関の指導を強く要望してやまない。然し言語障害児教育に関する, 地域社会における総合的にして効果的な専門的指導対策を, 早急に期待することは, 諸般の事情から困難な現状にある。子供の言語障害によって招来される教育的諸問題は, 単に, 医学的, 心理学的, 教育学的問題にとどまらず, その解決は, 他の心身障害児(者)教育とならんで, 社会政策上の課題として, 国家的見地からの総合的施策が必要であることは云うまでもない。

近年, 殊に, 凡そこの十年間の, わが国における言語障害児教育の進展には瞠目すべきものがある。特に, 小学校への難聴学級或は言語治療学級の設置の傾向は, 今日, 流行にも似た著しい普及状況を呈しつつある。このことは, 夙に, 心身障害児(者)の職業教育及びその進路

動向に強い関心を抱いている者として、大いに注目するところであるが、そこには、欧米先進諸国に比べ、わが国の心身障害児(者)に対する対策上の立ち遅れの問題と相俟って、言語障害治療教育の管理と指導上、今後、解明、解決を要する数多の問題が山積していることも事実である。

言語障害について考察するにあたっては、言語習得理論の動向、言語障害の定義と分類上の問題、言語障害の原因に関する考察、言語障害治療教育における管理と指導上の問題、さらに、言語障害児(者)に対する社会福祉対策上の問題等々について触れる必要があるが、ここでは、主として、治療教育における管理と指導にかかわる若干の問題を中心として考察したいと思う。

1. 指導目標設定上の問題

言語障害児に関する指導目標の設定にあたっては、云うまでもなく、個々の子供について、その言語能力を出来る限り効果的に発達させるよう指導し、援助することへの配慮が必要である。即ち、子供が相互に或いは大人に対して、自分の年令や発達段階にふさわしい話し言葉で、自分の意志、思考、感情などを相手に伝達することが可能になるよう指導し、援助することである。

具体的な指導目標としては、(i) 思考、感情の容易な表現の発達、(ii) 言葉の転移行動の発達——話し相手をよく認容し、或るコミュニケーションの場面から他の場面へ会話を適応させる行動の発達、(iii) 言葉や概念についての蓄積の拡大、(iv) 「読み」、「書く」ことのように言語技術の発達に対する言語の基礎的準備、(v) 言語障害の受容に基づく子供、家族への助力等が考えられる。ここで考慮すべきことは、言語障害自身の欲求を、指導計画にどのように生かすかということであるが、一般的に大別して二つの方向がみられる。先ず、その一つは、言語障害の原因的、病因的分類による言語障害児の欲求を基礎としている場合である。即ち、原因を、聴覚欠損、精神遅滞、脳傷害、失語症、悪性関節炎、情緒障害及び未成熟に求め、さらに、先天性言語不明瞭、先天性感受器疾患、口腔咽頭構造異常、音声調音器官(舌、唇、声帯)の欠損(未成年者)を加えて分類し⁽⁴⁾、夫々の子供の欲求を検討する場合である。子供の欲求には、原因、病因によって相違があり、従って、各々独自の指導が必要であるとされている。子供自身、言語組織が不十分ながら働くことに気付く場合には、子供のその時点での(或る場合は潜在的)言語能力を基礎とした指導計画によるべきであって、必ずしも、治療学的範囲に基づいた諸制限に拘泥すべきではないと考える。従って、子供の言語能力、障害の状況を記録するにあたっては、単

に、その障害の原因、病因に関してだけでなく、指導方法、内容も記述すべきであろう。次には、このような原因、病因的分類を避け、言語行動そのものを中心として分析する方法がある。米国イリノイ大学言語能力テスト(ITPA)⁽⁶⁾がそれである。このテストは、次の諸点について言語能力を評価し、診断する目的をもっているが、指導計画の立案、実施に際し、適切な方法を示唆する極めて有効なテストであると考えられている。即ち、テストの評価する点は、言語使用上の二つの水準について(表現上及び無意識的連続上の語法)、三つの主要な言語過程について(暗号を普通文に翻訳すること、普通文を暗号に直すこと、連想すること)、コミュニケーションの一定の経路についての三点である。このITPAテストは、神経学的理論によらず、学習理論、行動理論による機能に基礎を置いているが、今日のわが国における言語障害児教育の管理と指導の現状からみて、ITPAの日本版の早急な開発が要請されるところである。

言語障害児に対する効果的な指導計画の立案に関しては、先ず、個人的指導と集団の指導上の問題、検査と面接指導の頻度、指導計画の開始の時期、言語の能力段階に相応する指導目標、援助と指導上必要とする諸準備等の諸点について、その問題点を明確にし、適切な配慮をすることが必要であろう。次に各項目毎に考察したい。

(1) 個人指導と集団の指導上の問題

個人指導は、集団の指導に比べ、その指導計画の綿密さと実施の徹底において、短期間に効果的な結果を期待できる場合が多い。しかし、小集団の場合の集団的指導は、個人指導によっては不可能な子供相互間の交流経験を与えることができ、指導の質を向上させることが可能である。この交流経験は、云うまでもなく子供の知的、情緒的及び社会性の発達にとって極めて重要な意義をもっており、従って、集団的指導は有効な方法であると云える。個人指導か、それとも集団的指導を実施すべきかを選択するにあたっては、他の要素も考慮に入れて決定すべきである。例えば、先ず、教師や施設設備が個人指導を可能にするかどうか、或いは、子供自身が自分の障害について意識しているかどうか、意識していると思われる場合は、個人的配慮に基づく指導が考えられよう。いずれにしても、最も望ましいあり方は、最初は個人指導を中心として子供を扱い、指導過程に慣れるに従って徐々に集団の中に溶け込めるように配慮し、漸次集団的指導に移行することがよいと考える。

(2) 検査と面接指導上の頻度、回数の問題

障害児の年令、障害の程度、両親の協力及び、教師と施設設備上の諸制限等によって、子供を検査し、面

接指導を実施する頻度及びその期間は決まるのであるが、効果的に指導がなされるためには、週2～5回、面接時間は30分～60分が適当であると考えられる。勿論、障害の程度によって、その回数の増減、時間の延長短縮を計り、施設、学校における特別の指導に加えて、子供の日常生活の場にまで、できるだけ、指導を拡大すべきである。父兄、子供が、毎週或いは毎月の指導目標を、自ら検討するよう指導することによって指導計画の改善に反映させるよう、計画を綿密に再検討する必要がある。いずれにしても、子供が、言葉のもつ意味に愛着を持つことができる学習環境の創造に常に意を用いるよう、日常の指導計画を考慮すべきであろう。

(3) 言語指導の開始時期の問題

就学前における指導は、就学年令段階での指導に比較して、かなり容易であると考えられており、従って言語障害の検査、診断は、早期に実施すると同時に、子供の言語能力の発達を援助すべく、その指導内容と方法を確定し、できるだけ早くから指導を開始することが望ましいとする主張が多い⁽⁶⁾。他方、子供の言語行動は、その言語習得の時期を通して、若干修正できるとし、幼児の言語訓練の開始は少し延期すべきであるとする意見もある。即ち、心身の成熟は、初期の言語行動の発達に重要な役割をもつものであるが故に、幼児が、特殊な言語行動に関して、レディネスが不十分な、しかも、未成熟の段階での環境刺激や集中的訓練は、言語発達の面からは、必ずしも効果を期待できない。子供の大部分は、結局のところ、自分の発達の程度に応じて、言語能力を習得するものであるから、言語成熟過程が完全になるまで訓練を待つべきである。若し、成熟が少し遅れたとしても、その時点においては、子供も社会的経験をもつようになっており、言語的成熟の段階に近い場合、訓練努力はより少なくして効果を期待でき、子供も、訓練指導目的や内容についてより理解する能力があるとする立場である⁽⁷⁾。然し、このように、子供の成熟を待期し、その後、指導を実施する方法は、効果的な指導計画を考慮する上で、多くの不必要な複雑さを招来することがあり、従って、これまでの多くの研究と、治療教育上の経験は、言語障害児に対する効果的な指導は、早期に開始すべきであることを強調しているといえよう。

(4) 言語の能力段階に相応する指導目標の問題

言語能力の効果的発達を助長、援助するための言語指導は、次の三点が重要であることを確認する研究がある⁽⁸⁾。即ち、音声、認知の技術と概念形式の発達及び文法に適合した言語発達の三点である。そのうち、

文法的な側面からの研究は、子供の言語習得についての最近の言語理論の研究から生まれたものであり、子供の言語能力の水準を決定するにあたって重要な研究である。それは、言語障害児は、音声学的、語形形態的、文章の及び意味的機能の諸点から評価されるべきであることを示唆しており、子供が、言語の文法的構造を覚えようとする発達段階において、また、経験と概念という内面的事柄に対して新しい言語形式で話す準備ができていた時期に、具体的な指導目標が明確になるであろうとしている。この研究の基礎的前提は、多くの子供が、その経験、観察及び認知の成長過程において、意味的、文章の及び言語形態的に意味のある類似した言語を、大人の言語をモデルとして、それから抜粋するという事実によっている。子供が言語を習得する場合、大人から直接教えられることなしに、会話のモデルの刺激によって、子供自身で、生き生きした言語を自分のものにすることが多いし、言語習得が、早期の段階で適切に行なわれた場合、子供は、かなり高水準の言語を習得し、漸次、構文の規則を大人から習得するようになるであろう。

(5) 他機関との協力の必要

言語障害児の管理と指導においては、子供の言語行動を修正、改善するため、適切な指導計画と、指導結果の評価のための機能を備えねばならないのであるが、言語障害に付随して生ずる他の問題を留意しての配慮も、指導計画の立案にあたって必要となる。そのためには、定期的に、障害或いは損傷の状態を、検査、診断するための主要な補助的指導措置として、医学、心理学的立場からの配慮と教育的評価の措置を講ずる等、他の施設の援助、協力を要請する方策も当然考慮されなければならないであろう。

2. 就学前の措置と社会化に関する問題

感覚、運動、知能及び情緒的な機能に欠陥のないと思われる子供は大部分、就学前には、音声、語義、文章など言語の成分について、計画的に、指導を受け、学習することはないが、これらの子供の集団の中には、言語習得上、病的になんらかの欠陥のある者が含まれていることが推定される。このような子供に対する言語指導上の配慮は、確かに子供が未発達の段階にあることもあって、何ら実施されていない状況にある。また、「読み」、「書き」は会話することと密接な関係があることから、言語機能の病理を予想することができるが、神経学的原因で、「読み」、「書き」に支障のある子供は、会話の理解や話すことでも障害があることを見出されている⁽⁹⁾。従って、病理学的欠陥から書き言葉の習得に支障のある

子供は、話すことの習得に障害があることが推定される。以上のことから、幼児が、就学前に、医学的、心理学的診断を受け、適切に指導されるならば、将来「異常」として社会的に区別されることを未然に防止することができ、言語能力は低いが「正常」であるものとして、社会的に受容されることが可能になるものと考えられる。

言語障害児教育の普及は、他の教育と同様、社会的要請と密接な関係をもっているが、教育対象が正常児でないだけに、そこに異質な傾向が見出される。就学前の幼児の言語障害に関する広汎な資料の不足は、このような幼児に対する社会的要請欠如の一つの反映とも考えられる。また、言語障害児についての諸研究に示されている対象児童の年齢は、大体、5才から15才が中心で、就学年令の学童に対する教育上の社会的要請に相応している。言語機能について何らかの障害をもつと思われる幼児のみならず、就学前のすべての幼児の言語機能について社会的関心が高まり、適切な対策が、計画的に、効果的に実施されるならば、現在の就学時における言語障害児教育に与える影響は、極めて大きいものがあろう。

言語障害についての不十分な診断が、言語能力は高くはないが、しかし、極端に無能ではない「正常」な子供に対し、あいまいな分類をすることによって、誤って言語障害児のレッテルを貼る危険性が多分にあると思われる。これらの子供は、「異常」と診断されたとしても、希望のない暗闇の中で苦しむことは少ないが、さりとて、全く「正常」として扱われるわけでもなく、明暗の境界の陰の下に置かれた、所謂、「日陰の子」となる恐れなしとしない⁹⁹。この問題は、医学、心理学及び教育学的立場からの、適確な診断の発達と相俟って、早急に、取り組むべき課題の一つであろう。子供が、言語障害児として区別すべきかどうかの決定条件として、言語能力が問題となるのは、当然であるが、然し、実際には、精神遅滞の場合にも見られるように、屢々、その決め手として、子供の社会的適応の状況を重視する場合がある。このことは、非常に重要な問題を包含している。教育上、その管理と指導にあたっては、子供の社会化の過程を十分理解する必要があることは云うまでもないが、言語障害児の教育に際しては、特に、社会化の過程における個人的差異について考慮せねばならない。言語障害児にとって「読み」、「書き」、「話し」、「会話する」学習が困難であることは、子供の社会化に、重大な影響を与えることは必須であり、普通児の社会化とは全く異質の過程を経験することになる。この言語障害児の社会化の過程を理解するためには、子供の経験、モチベーション、パーソナリティと言語障害によってもたらされる諸因子との関係を、よく考察することが大切であろう。特に、子供が、

モチベーションやパーソナリティの要因を欠く場合、それが社会的な適応と密接な関係があることは、予想するに難くないところである。

結 び

言語障害について、凡そ、十年以前には、欧米先進国は云うに及ばず、わが国にあっては、それが感覚或いは知能の損傷の子供に生ずることは予想されても、言語障害の性質、原因及びその影響等に関しては、今日のように明確な社会意識をもって、活発にとりあげられるまでには到らなかったことは周知のところであるが、今では教師、父兄の言語障害に対する関心も、異常と思われる程向上し、問題解決への社会的認識が深まりつつあるのが実状である。しかし、他方、子供の言語発達の評価に関する方策が、未発達の状態にあることは問題であろう。心身の健全な子供は兎も角、感覚、行動、情緒的に何らかの欠陥のある子供は、「読み」、「書き」、「話し」、「会話」を理解することなど、言語に関する面では、その大半が、期待するような能力を獲得することは、非常に困難な状況に置かれている。この原因の一つとして、指導面、施設面での不備に基づく場合があげられる。言語障害児教育も、教育一般の基本目標と同様、社会的妥当性をもたねばならぬことは勿論であって、障害児が、社会的に受容されることができるよう援助し、出来る限り、その個人的可能性を発見、伸長させるよう指導することが望まれる。子供の社会的適応についての理解なくして、言語機能の改善を強調することは、誤りも甚しいと云わねばならない。子供自身が社会的適応能力を獲得するためには、先ず、他者に対しては内面的満足を与えまた自分もそれを得る「愛情」、子供の集団への「受容」、人間の価値を尊重し自己発達を導く「是認」の三点を、如何にして、子供に与えることが出来るか、全人教育の視点に立ち、言語障害児教育の管理と指導にあたる者の十分な考慮を要するところである。

障害をもった子供は、予め、社会が同意した無能の水準に組み込められ、それを甘受せざるを得ない宿命を荷うものであるとの諦観を抱いてはなるまい。社会に対しては、たえず言語能力についての社会的偏見の是正を働きかけ、また、言語障害児に対しては、社会的適応能力をもって言語的欠陥をどう補うべきかを、常に念頭において指導することが大切であり、熟慮すべきことであろう。(昭和47年8月 稿)

参 考 文 献

- (1) Chomsky, N. Aspect of the Theory of syntax. Cambridge, Mass.

- The MIT Press. 1965.
- "The formal nature of language." In Lenneberg, E. Biological foundations of language. New York, John Wiley & Sons. 1967.
- Language and Mind. Enlarged ed. Harcourt Brace Jovanovich. 1972.
- (2) Hall, R. Linguistics and your language. Garden City, N. Y. Doubleday. 1960.
- (3) Carroll, J. "Language development in children." In Saporta, S. ed. Psycholinguistics. New York, Holt, Rinehart and Winston, 1961.
- (4) Lenneberg, E. "Language disorders in childhood." Harvard Educational Review. 34:152-177. 1964.
- (5) McCarthy, J. J. and Kirk, S. Examiners Manual, Illinois Test of Psycholinguistic Abilities. Urbana, Ill, University of Illinois Press. 1968.
- (6) Bangs, T. Language and learning disorders of the pre-academic child. New York, Appleton-Century-Crofts. 1968.
- (7) Lenneberg, E. "The natural history of language" In Smith, F. and Miller, G. (ed) The genesis of language, Cambridge, Mass. the MIT Press. 1966.
- (8) Chomsky, N. Syntactic Structures. The Hague, Mouton and Co, 1957.
- McNeill, D. "Developmental psycholinguistics." In Smith, F. and Miller, G. (ed) ibid. 1966.
- (9) Zedler, E. Y. "Screening underachieving pupils for risk of neurological impairment". In Hellmuth, J. (ed.) Learning Disorders, Vol. 3, Seattle, Special Child Publications.
- (10) Ellingson, C. The shadow children. Chicago, Topaz Books.